

ガ格の総記／中立叙述用法と 裸名詞句の総称／存在解釈の統一的説明*

鈴木 彩香

要 旨

本稿は、久野(1973)の指摘する2種類のガ格の用法と Diesing (1992)が論じる裸名詞句の2つの解釈に関する観察に対して、統一的な説明を与えることを目指すものである。久野は日本語のガ格に中立叙述と総記という2つの用法があることを指摘し、その用法が一時的対恒常性という述語の持つ時間的な性質の違いに起因していると述べている。一方 Diesing は裸名詞句の解釈に関して、その総称／存在という解釈が、Stage-level と Individual-level と呼ばれる、久野の述語分類と基本的に同じ意味的基準に基づいて導かれるとの観察を提示している。本稿では両者の観察が、情報構造という観点からは異なる性質を示すものの、主語名詞の特定性という観点からは統合可能であることを示し、両者の扱っている対立が判断形式の違いに還元できるものであることを指摘する。またそれが、Diesing の提案する統語構造においてどう位置づけられるかを論じる。

キーワード

場面レベル述語／個体レベル述語(SLP/ILP)、中立叙述／総記、存在／総称解釈、
情報構造、特定性、単一判断／複合判断

1 はじめに

本稿では、久野 (1973)における中立叙述／総記という日本語のガ格の用法の対立が、英語の裸名詞句における存在／総称解釈の対立と平行的に分析できることを論証する。

具体的な議論の流れは以下の通りである。2節においてそれぞれの先行研究を概観した後、3節では述語の意味的性質に伴う構造の違いに関して、両者が同じ1つの可能性を示唆していることを指摘する。そして Diesing (1992)、Kratzer (1989, 1995)の構造的位相と意味解釈を写像関係で捉える枠組みから、これらに統一的な説明が与えられることを示す。ただし、中立叙述／総記と存在解釈／総称解釈という対立は、基本的に前者はガ格の用法を、後者は名詞句の解釈を問題にした論であるという違いが存在する。4節で見ると、情報構造の観点からこの問題を扱った場合には、この違いに伴って主語をフォーカスとするのかト

* 本研究は、平成26年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)(課題番号:26・1188)の助成を受けたものであり、本稿はその成果の一部である。

ピックとするのかという点で、両者は異なる構造を持っていることになってしまう。そこで、続く5節以降では、どのようにして両者を同一の枠組みで扱うことが可能になるのかという問題を論じる。5節では、この対立が主語の特定性に関わる対立として捉え直せることを日本語の数量詞遊離の現象への言及を通して示し、6節では、この対立がさらに判断形式の違いに還元できるものであることを示す。7節では議論のまとめを行う。

2 先行研究

2.1 ガ格の用法：中立叙述／総記

久野(1973)は、主語に付与されるガ格の用法に「中立叙述」と「総記」の2種類があることを指摘した。総記とは、述語の表す内容に対して主語をとりたて、主語に「X、そしてXのみが」という含意を持たせる用法であり、中立叙述とはそのような含意が存在しない用法である。そして、久野は述語の意味的性質がこの2つの用法の可否に影響することを指摘している。

- (1) a. 大変だ、太郎が病気だ。 (中立叙述／総記)
 b. 太郎が学生です。 (*中立叙述／総記) (久野 1973: 32)

(1a)が示すように、「病気だ」のような特定の時間軸に縛られた動作や一時的な状態を表す述語であれば、ガ格の用法としては中立叙述と総記のどちらも許される。一方、(1b)が示すように、「学生だ」のような恒常的な属性について述べる述語は総記の用法しか許されない。なお、本稿では次節で見る Diesing (1992)の用語に従い、(1a)のような述語を場面レベル述語(Stage-level predicate, 以下 SLP)、(1b)のような述語を個体レベル述語(Individual-level predicate, 以下 ILP)と呼ぶ。

以上のことから、久野 (1973)の指摘する述語とガ格の用法の関係は以下の(2)のようにまとめられる。

- (2) a. ガ格主語+SLP (中立叙述／総記)
 b. ガ格主語+ILP (*中立叙述／総記)

2.2 裸名詞の解釈：存在／総称

一方、Diesing (1992)が扱っているのは裸名詞句の解釈である。裸名詞主語の解釈には、「そのようなXがいる」という存在的な解釈と「Xはすべてそのような属性を持つ」という総称的な解釈の2つがあることが知られているが、常にこの2つの解釈が可能なのではない。SLP、ILPという述語の意味的性質が解釈の可否に影響を与えることが Carlson (1977)によって指摘されている。

- (3) a. Firemen are available. (存在／総称)
b. Firemen are altruistic. (*存在／総称)

(3a)が示すように、SLPの主語は「出動可能な消防士がいる」という存在解釈と「消防士はいつでも出動可能であるものだ」という総称解釈のどちらも許される。一方、(3b)が示すように、ILPの主語は「消防士は利他主義者であるものだ」という総称解釈しか許されない。この関係は、以下の(4)のようにまとめられる。

- (4) a. 裸名詞主語+SLP (存在／総称)
b. 裸名詞主語+ILP (*存在／総称)

裸名詞句の解釈は英語のみに当てはまる現象ではなく、冠詞の有無といった違いを超えて日本語にも存在する現象であることが指摘されている(鈴木 2013; Endo 1994)。ただし、英語とは異なり日本語には助詞が存在するので、名詞の解釈と助詞の関係に注意を払う必要がある。この問題については、次節で詳述する。

3 ガ格の用法と裸名詞の解釈

久野 (1973)による(2)の一般化と(4)の一般化は明らかに、SLP/ILP という述語の意味的な分類とそれがとる構造の関係について、1つの可能性を指し示している。すなわち、SLPの主語の構造的位置に許される意味解釈がILPの主語の構造的位置には許されず、一方でSLPの主語はILPの主語の構造的位置に許される解釈も同様に許されるということである。本稿では、(2)(4)が同じ原理に従って説明されるべきものであることを示す。まず、(4)に説明を与える Diesing (1992)の枠組みを以下で確認する。

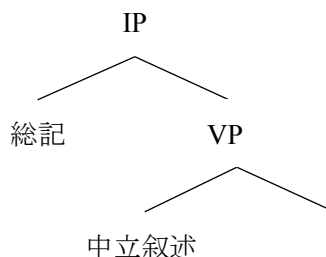
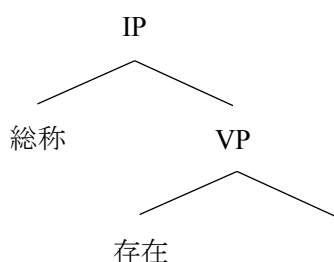
Diesing は、(4)のような英語の裸名詞主語の解釈に対して、SLP、ILPの構造的違いを仮定し、名詞句の構造的位置と意味解釈を写像関係で捉えることによって説明を与えた。Kratzer (1989, 1995)によれば、SLPとILPは意味上分類されるばかりでなく、統語構造としても違いがある。それは、SLPは抽象的な時空間的場所(spatiotemporal location)の項位置を持つのに対し、ILPはこれを持たないという違いであり、この違いはVP内主語仮説(VP-Internal Hypothesis)におけるIP指定部とVP指定部という2つの主語位置を前提に、ILP/SLPそれぞれの主語名詞句の基底生成位置の違いに還元される。ILPの主語はIP指定部に基底生成され、動詞によって θ 役割を与えられたVP指定部のPRO主語をコントロールするという他動的な構造を持つのに対し、SLPの主語はVP指定部に基底生成された後、IP指定部へ移動するという繰上げ構造を持っている。これは以下の(5)のように表すことができる。

したがって、潜在的存在量化詞は中核スコープで働くものであるため、VP内部の名詞句を束縛することが可能である。それに対して、Genと量化副詞は制限節で働くものであるためにVPの外部に適用される。こうして、写像仮説により裸名詞句の解釈の問題は、不定名詞句がどの演算子に縛られ、存在／総称のどちらの解釈を受け得るかは統語的な位置によって決まるといふ、構造の問題に還元されることになる。(5)(6)から示されるように、SLPの主語は潜在的存在量化詞、Genのどちらにも束縛され得る位置に存在し、ILPの主語はGenにのみ束縛される位置に存在する。このことから、SLPの主語は存在／総称どちらの解釈も受けられるが、ILPの主語は総称解釈しか受けられないことが説明される。

上記のDiesing (1992)の枠組みが正しければ、久野 (1973)の観察に関しても同様にIP指定部とVP指定部という構造的な位置と意味解釈を写像関係で捉えることによって説明が与えられるはずである。裸名詞の解釈との対応から考えれば、総記として解釈されるための位置はILPの主語が基底生成されSLPの主語が繰り上がる位置であることができるIP指定部の位置であり、中立叙述として解釈されるための位置がSLPの主語が基底生成されるVP指定部の位置であることになる。すなわち、裸名詞の解釈と叙述タイプの対応は、解釈が得られるための構造的な位置という観点から以下の(7)のように捉えることができるものである。

(7) a. 裸名詞の解釈

b. ガ格の用法



久野 (1973)の観察は、例に挙げられている主語名詞は「太郎」などの定名詞が多いものの、裸名詞句であっても対立は成り立つ。(7)が正しければ、ガが中立叙述となる裸名詞主語の解釈は存在、総記となる主語の解釈は総称解釈を受けていることが予測される。そして、この予測は正しい。

日本語の裸名詞句の解釈は助詞とも密接な関係があり、以下の(8)に見るように、主語が総称解釈と存在解釈の双方を許すSLPにおいても、典型的には裸名詞が総称解釈を受ける際にはハで、存在解釈を受ける際にはガでマークされる。そして、(9)に見るようにILPの主語が総称解釈を受ける場合にも、ハでマークされるのがデフォルトである。

(8) a. 子供が元気だ。(存在)

b. 子供は元気だ。(総称)

(9) 子供は正直者だ。(総称)

しかし、総称解釈を受ける名詞をマークするのはハに限られるわけではない。(8a)のような存在解釈を受ける裸名詞句をマークするのは中立叙述のガであるが、以下の(10)に見るようにガが義務的に総記となる ILP の主語においては、総称解釈を受けることになる。(10)は正直者の子供がいる、という解釈ではなく、他の集合、例えば大人一般などと比して子供一般が正直なものである、という解釈であり、裸名詞「子供」は総称的に解釈される。

(10) 子供が正直者だ。

以上、裸名詞の主語を問題にした際には、解釈が得られるための位置を通して(7)が重なり合うものであることを確認した。すなわち、VP 指定部に主語が位置する場合にガは中立叙述となり、その位置にある裸名詞には存在解釈が与えられること、そして IP 指定部に主語が位置する場合にガは総記となり、その位置にある裸名詞には総称解釈が与えられるということである。

4 情報構造との対応関係

前節では Diesing の枠組みが、ガ格の用法と裸名詞の解釈に統一的な説明を与えるものであることを確認した。しかし、久野はガ格の用法という観点からこの問題にアプローチしており、裸名詞が総称解釈を受ける際の典型的な標示であるハについては扱っていないなど、裸名詞の解釈とは問題にしている観点が異なっているために、ずれが生じる部分がある。そこで、両者の統一性がどのようなレベルに位置づけられるものであるのかを明らかにする必要がある。本節では、ガ格の用法を情報構造から捉え直す先行研究を概観し、情報構造の観点からではガ格の用法と裸名詞の解釈の統一性がうまく捉えられない部分があることを指摘する。

4.1 ガの用法と情報構造 : Heycock (1993, 2008)

日本語のガ標示、ハ標示をめぐる先行研究は非常に膨大なものがあり、様々な問題を含んでいるが、Heycock (1993, 2008)は、ガ標示と情報構造の間のつながり²を設定することで、久野 (1973)の観察を情報構造の観点から捉え直している。Heycock (1993)は情報構造上の規定と日本語におけるその表れについて、以下の(11)のように定めることで、久野の観察に原理的な説明を与えた。

² Heycock (1993, 2008)では、ガがフォーカスマーカーであるというような、直接的にガ格標示と情報構造を結びつける考え方はとられていない。ガはあくまで主格のマーカーであり、ガは間接的、消極的な意味を除いては情報構造的な資格として変換されないとしている。本稿も同じ立場をとる。

- (11) a. 名詞がトピックになる時にはハでマークされなければならない。
- b. 節はその限りでないが、文は必ずトピックを持たなければならない。(ただし、トピックが顕在的に現れているか否かは問わない。)
- c. トピックとフォーカスは同一の要素であってはならない。
- d. ILP と違って SLP はトピックとして利用できる Davidson 流のイベント項を持っている。

(11)における Davidson 流のイベント項とは、Kratzer (1989, 1995)の抽象的な時空間的場所の項と同一視できるものである。以降、これをイベント項という用語で統一する。

(11)の規定を用いると、以下の(12)のような SLP の場合、イベント項がトピックとして利用できるため、文全体がフォーカスとなることも、述語をトピックとして主語がフォーカスを受けることも可能である。前者が中立叙述のガ、後者が総記のガの解釈である。

- (12) 大変だ、太郎が病気だ。 ((1a)再掲)

つまり、中立叙述のガとは文全体がフォーカスになった場合の、主語を特別にとりたてることなく、単にイベントの中の中立的な参与者として捉える際の解釈であると考えることができる。そして、総記のガとは述語をトピックとして主語をフォーカスにする場合の解釈であると捉えられる。

一方、以下の(13)のような ILP の場合は、イベント項をトピックにすることはできない。そして、ハでマークされていない主語もトピックになることはできないので、利用できるトピックは述語以外にない。したがって必然的に主語がフォーカスとなる。これが ILP のガ格主語が総記の解釈しか持たない理由である。

- (13) 太郎が学生です。 ((1b)再掲)

また、このような現象は主文に限られることが知られているが、これは、トピックの要求が文の単位であり、複文である場合は文の他の要素にトピックを求めることができることによる。

4.2 裸名詞句の解釈と情報構造

裸名詞句の解釈に関しても同様に考えることができる。Heycock (1993)の(11d)の規定を当てはめれば、(14a)のような SLP はイベント項をトピックとして文全体をフォーカスとすることが許されるが、(14b)のような ILP にはこれが許されないことになる。

- (14) a. 子供が元気だ。
 b. 子供は正直者だ。

つまり、中立叙述と裸名詞句の存在解釈はどちらも文フォーカスの際の解釈として統一的に捉えることができるのだが、ここで問題になるのは総記と総称解釈の関係である。文全体をフォーカスとすることができない ILP においては、原理的には主語がトピックを担う場合と述語がトピックを担って主語をフォーカスとする場合の両方の可能性がある。そしてこれがどちらに決まるかは主語をマークする助詞に左右される。すなわち、主語が総称解釈を受ける際の情報構造は、(14b)のようにハでマークされている場合にはトピックを、ガでマークされている場合にはフォーカスを担うことになる。この点で、情報構造の観点からガの用法と裸名詞の解釈を統一的に扱う上では避けがたい齟齬が生じる。久野 (1973) の総記か中立叙述かという対立を問題にしていた際には、ガ格の用法のみを問題にしていたので、(11a)から主語がトピックとなることはなかった。しかし、総称解釈を受ける裸名詞主語はガでマークされてフォーカスとなることも可能だが、そこには総記という特別な含意が生じることになるため、デフォルトではハでマークされトピックとなることを考えなければならない。つまり、総称解釈を問題にする時には、述語をトピックとして主語がフォーカスになる場合と、主語をトピックとして述語がフォーカスになる場合という正反対の情報構造を考慮に入れなければならないのである。

構造的な位置と意味解釈の関係からこれを捉え直せば、以下のようになる。VP 指定部に主語が存在する場合は、主語は単なるイベントの参与者として、イベントと一体に解釈されることが可能である。この場合、ガ格の用法としては中立叙述であり、裸名詞主語の解釈としては存在解釈であり、情報構造から言えば文フォーカスであるというように、これらは VP 指定部に主語が位置するという構造によって統一的に捉えることができる。一方 IP 指定部の位置とは、イベントとは切り離され主語名詞をとりたてて問題にする際の位置であり、そのとりたて方にはフォーカスにする場合とトピックにする場合の 2 種類がある。述語をトピックとしてそれに当てはまる変項を指定し、主語をフォーカスとしてとりたてる情報構造を持つのが総記の解釈である。一方、主語をトピックとしてとりたて、それについて述語の表す内容が当てはまることを述べることもできる。IP 指定部は総称解釈を受ける統語的位置であるので、主語が裸名詞であった場合には典型的にはトピックとなることが多いが、フォーカスを受ける場合にも総称解釈を受けることが可能であることは前節の(10)でも確認した通りである。これらの関係は以下の(15)のようにまとめることができる。

(15)

	裸名詞の解釈	助詞	情報構造
IP 指定部	存在解釈	中立叙述ガ	文フォーカス
VP 指定部	総称解釈	総記ガ	主語フォーカス
		ハ	主語トピック

このように、トピックとフォーカスという真逆の情報を担う名詞が位置する IP 指定部の位置は、この位置に来る名詞が担う情報構造と直接的に結びつけることはできない。以下では、IP 指定部と VP 指定部という構造的位置は何に結びついているのか、これらは何の対立として捉えることができるのか、ということの問題にする。

5 IP 指定部と主語の特定性

本節では、IP 指定部という構造的位置が、その位置を占める名詞の特定性に制約を与えるものであることを主張する。そして、前節で見た文フォーカス対主語トピックあるいはフォーカスという対立が、主語の特定性の対立として捉えられることを示す。

5.1 Milsark (1974) の一般化と日本語の数量詞遊離

まず、Diesing (1992)に従えば IP 指定部とは ILP の主語が義務的に占める位置であり、ILP の主語名詞の意味的性質に関しては、Milsark (1974)の指摘がある。Milsark は ILP の主語は強決定詞(strong determiner)を伴うものでなければならないことを指摘している。強決定詞とは定冠詞 the, every, all, most などであり、弱決定詞(weak determiner)は不定冠詞の a, some, a few, manyなどを指す。強決定詞は必ず集合を前提とした意味を持つが、弱決定詞は集合を前提とした解釈(比率読み)とそのような前提を持たない解釈(基数詞読み)のどちらも可能である。ただし、some の母音が弱化した sm においては、基数詞読みしか許されないとされている。そのような前提を持たない弱い名詞は、(16d)に見るように ILP の主語になることが許されない。(16c)のように ILP の主語になれるのは強い名詞のみである。一方、SLP であれば弱い主語も強い主語も許すことが(16a,b)から示される。

- (16) a. The man is sick. (Strong + SLP)
 b. The man is tall. (Strong + ILP)
 c. Sm men are sick. (Weak + SLP)
 d. *Sm men are tall. (*Weak + ILP)

(16)の Milsark の一般化は、日本語の数量詞遊離現象からも支持される。日本語の数量詞遊離の現象に関しては、先行研究では述語の SLP/ILP という意味的な分類が、主語からの数量詞遊離の容認度に影響を及ぼすことが指摘されている(Harada 1976; Ishii 1991; 三原 1998; Nakanishi 2008; 大木 1987; 奥津 1996; 佐川 1978 他)。以下の(17)に見るように、SLP と ILP では、主語からの存在量化詞の遊離の可否が対立する。

- (17) a. 学生が 3 人裸足だ。
 b. *学生が 3 人正直者だ。

これは Milsark の一般化に非常によく似ている。以下の(18)に見るように、[Q の N]が主語である場合には述語の性質による対立が生じず、(5)のような対立は主語 NP から数量詞が遊離した場合に限って現れるためである。そして、日本語の存在量化詞の遊離のホスト名詞には、指示が不特定でなければならないという制約がかかると考えられる。

- (18) a. 3 人の学生が裸足だ。
 b. 3 人の学生が正直者だ。

以下の(19a)の「3 人の男」には、3 人という数量を問題にする指示が不特定の解釈と、ゼロの指示詞を伴っていることが想定できる「その 3 人の男」という指示が特定の解釈があり得るが、後者の解釈は(19b)では与えられない。

- (19) a. 花子は 3 人の男を招待したがっている。
 b. 花子は 男を 3 人招待したがっている。

(20) 彼ら／そいつらは皆学生です。

(Homma et al 1991: 16-17)

この違いは、(19)の各文の「男」を「彼ら／そいつら」で受ける(20)を後続させることができるか否かによってより明確になる。(19a)は「彼ら／そいつら」を後続させることが可能である一方、(19b)における「男」はその存在のみを述べる解釈しか許されないため、「彼ら／そいつら」を後続させることができない(Homma et al 1991)。[Q の N]という形式の持つ意味は、特定の N を指示する意味と数量のみを問題にした不特定の N という意味で曖昧であるが、存在量化詞が遊離している場合、そのホスト名詞は特定の N を指示することはできないのである。

つまり、ILP の主語からの存在量化詞の遊離が不可能なのは、(16)の Milsark の一般化と同様に主語名詞の意味的性質が関わっているということである。存在量化詞の遊離した名詞句の性質とは、指示対象が不特定でなければならないというものであったが、そのような名詞は ILP の主語には立てないということが分かる。一方で、SLP であれば指示が不特定の名詞も主語に立つことができる。

上記の議論から、(16)の Milsark の一般化とは、ILP の主語、すなわち IP 指定部を占める名詞は特定のなければならない³という制約であったと言い換えることができる。ここでの特定性という用語は、「少なくとも話し手の中で特定の指示対象が念頭に置かれている、指示対象が同定されている」という意味で用いる。裸名詞の総称解釈とは、集合を前提と

³ 厳密には、前提性と特定性は同じ概念ではない。特定性が前提性を包含する関係であり、「10 人のうちの 3 人」と言った場合には、前提となる集合が設定されているため強決定的であるが、「3 人」の指示は特定されていない、つまり 3 という数さえ満たせば A,B,C であっても D,E,F であってもよいような場合がある。ただし、ここでは Milsark の「ILP の主語が強決定的でなければならない」という一般化は「ILP の主語は特定のなければならない」というより広い範囲で成立する制約の一部であると捉えている。

しその全てということ指定する解釈であるため、種(kind)を指示することによって指示対象が特定された解釈である。一方、存在解釈とは指示対象の同定を必要とせず、対象の存在のみを述べる不特定の解釈である。そして、ILPの裸名詞主語に総称解釈しか許されないのは、ILPの主語は指示対象が不特定であってはならないためであると考えられる。

5.2 情報構造と主語の特定性

前節で論じたIP指定部を占める名詞の特定性という概念は、情報構造と非常に密接な関係がある。IP指定部の位置で主語をとりたてる場合には、トピックとしてとりたてる場合とフォーカスとしてとりたてる場合のいずれであっても、指示が特定の名詞でなければならないという制約がかかる⁴。(21)の非文法性が示すように、トピックとなる名詞は不特定であってはならないことが知られている(久野 1973; Tomioka 2007)。

(21) *誰かは来ました。

同様に、述語の表す内容に当てはまる変項を指定する、つまり述語との関係において新情報となるという意味でフォーカスとなる要素も、不特定であってはならない⁵ことが以下の(22)のような例から示される。

(22) *来たのは誰かだ。

(22)と同様に、総記も述語をトピックとして主語をフォーカスとする構造を持っている。つまり、主語がフォーカスを受ける情報構造とトピックとなる情報構造では、主語が特定のなければならないという点で共通しているということである。次節で指摘するように、両者は判断形式のレベルで統一的に扱うことができる。

その一方で、文全体をフォーカスにする場合には、主語の特定性に指定はない。VP指定部の位置が主語を特にとりたてることなく、イベントの中の参与者として解釈するための位置であることはすでに述べた。このような解釈の典型が前提のない存在自体が新しい主語について述べるものであるため、裸名詞における存在解釈のように不特定の主語が現れることが多いが、久野の中立叙述文において定名詞が現れることから分かるように、指

⁴ 小林 (2010)は、本稿で扱っているような現象とは独立に、主語移動と呼ばれるIP指定部への義務的な移動を「主題」解釈へと写像されるためのA'移動であると捉えることを主張している。小林 (2010)のIP指定部が存在的前提(existential presupposition)解釈と結びついた位置であるという指摘、そしてこの位置を占めることができるのは指示的(referential)な要素のみであるという指摘は、本稿の主張とも整合するものである。小林 (2010)の「指示的」という用語と本稿での「特定の」という用語は共通しているものと考えられる。

⁵ ここで「不特定」な要素としているのは、三尾 (1979)、金井 (2010)において不定語の「不定個称」と呼ばれている要素であり、「疑問用法」とされる「誰」などの要素とは区別する。金井 (2010)では、言及対象の外延、または内包を疑問として喚起するのが疑問用法であり、それを不定のまま文の要素として組み込むのが不定個称であるとされている。

示が特定されているか否かということはこの位置には関わらない。「主語フォーカス／トピック」対「文フォーカス」という対立は、主語の特定性に指定があるか否かという点で対立するものと捉えられるのである。

6 判断論：単一判断と複合判断

前節では、主語が特定でなければならない場合の叙述と主語の特定性が関わらない叙述の対立があることを見た。本節では、この対立が判断論に還元できる問題であることを指摘する。

Kuroda (1972, 1992)は、日本語の以下の(23)のような対立が判断(judgment)の対立に対応していることを指摘した。

- (23) a. 猫はあそこで眠っている。
b. 猫があそこで眠っている。 (Kuroda 1992: 21)

(23a)のような主語をハで主題化した文は、話者が「猫」という対象物に注意を向けた後に、それが「あそこで眠っている」という叙述をするものである。一方、(23b)のような主語がガで標示される文は、話者が猫が眠っている状況をそのまま捉え、その中の要素を何もとりたてることなく、事実の発見を単に伝える文である。Kuroda (1972, 1992)は、(23a)のような文を複合判断(categorical judgment)の文、(23b)のような文を単一判断(thetic judgment)の文であるとしている。この対立は西欧哲学に端を発する概念であるが、複合判断とは判断の対象とその内容が必要とされる二項分節的な複合形式をとる判断形式であるのに対し、単一判断とは存在承認(existential commitment)のみで成り立つ判断形式であるとまとめることができる(Ladusaw 1994)。

ただし、Kuroda は言及していないが、(23b)が単一判断の文であるというのは、中立叙述として解釈される場合のみである。(23b)のようなSLPの主語は、中立叙述だけではなく総記で解釈することもできる。その場合、本稿では主語をとりたててそれについて述べる複合判断であると主張する。本稿では、主語が特定されていなければならない文の構造は複合判断の形式をとっており、主語の特定性が関わらない文の構造は単一判断の形式をとっていると考える。判断論と情報構造との関係に関しては、Lambrecht (1994)に代表されるように、主語がトピックとなるか否かという対立から捉えられることが多い。複合判断の文はtopic-commentの文であり、単一判断の文は非主題主語(non-topic sentences)を持つ文であるとされる。しかし、以上の議論から分かることは、複合判断はtopic-commentの構造に限られず、focus-presuppositionの関係であっても構わないということであり、述語をトピックとして主語にフォーカスを当てる構造、つまり久野の総記の文とは複合判断文の一種であ

るといふことである⁶。

7 まとめ

本稿では、裸名詞の解釈とガ格の用法が、IP 指定部に主語が存在するか、VP 指定部に主語が存在するかという主語名詞の統語的位置から統一的な説明を与えることができることを論じた。ここまでの議論は以下の(24)のようにまとめることができる。

(24)

	裸名詞の解釈	助詞	情報構造	主語の特定性	判断形式
VP 指定部	存在解釈	中立叙述ガ	文フォーカス	指定なし	単一判断
IP 指定部	総称解釈	総記ガ	主語フォーカス	*不特定	複合判断
		ハ	主語トピック		

VP 指定部に位置する裸名詞主語の解釈が存在解釈であり、これは叙述タイプとしては中立叙述、情報構造としては文全体をフォーカスとする構造に対応する。一方、IP 指定部に位置する裸名詞主語の解釈が総称解釈であり、日本語においてこれがガで標示された場合には総記のガ、ハで標示された場合には主題となる。これに伴い、IP 指定部の位置を情報構造と直接結びつけることはできないことになる。ガでマークされた場合には主語フォーカス、ハでマークされた場合には主語トピックとなるためである。

VP 指定部と IP 指定部という構造的な位置と直接結びつけることができるのは、この位置に現れる名詞の特定性である。VP 指定部に現れる主語の特定性には指定がなく、裸名詞であれば不特定になるが、定名詞などのあらかじめ指示を持つものが生起してもよい。一方、IP 指定部に現れる主語は指示が特定のものでなくてはならない。情報構造から捉えた際には、この位置に来る名詞はトピックとフォーカスという異なる性質を示すものであることになってしまうが、この違いは主語の特定性という観点からは統一的に捉えられるものである。そして、VP 指定部に主語が存在する、特定性の関与しない叙述と、IP 指定部に主語が存在する、特定性に制約のある叙述は、判断形式の対立に還元することができる。すなわち、前者が単一判断、後者が複合判断であり、裸名詞の解釈とガ格の用法、およびその意味解釈が与えられる構造的な位置は、判断形式の対立として統一的な説明を与えられることになる。

⁶ ガが単一判断だけでなく、複合的な判断を含む場合があること、そしてそれが中立叙述と総記の区別に対応していることは上山 (2007) や Deguchi (2012) にも指摘がある。ただ、本稿の主張で特に重要な点は、ガの中立叙述／総記と裸名詞句の存在／総称という 2 つの解釈の関係を 2 つの判断形式の観点から統一的に説明しようとした点であり、単にガの 2 用法を判断形式の違いに結びつけただけでないことは強調しておきたい。

参考文献

- 大木充 (1987)「日本語の遊離数量詞の談話機能について」『視聴覚外国語教育研究』10: 37-67.
大阪外国語大学.
- 奥津敬一郎 (1996)「連体即連用? (3-4)」『日本語学』15(1-2): 112-119, 95-105.
- 上山あゆみ (2007)「文の構造と判断論」長谷川信子(編)『日本語の主文現象』113-144.ひつじ書房.
- 金井勇人 (2010)「不定語(句)「誰」「誰か」「誰も」について」『国際交流センター紀要』4: 21-29.
埼玉大学国際交流センター.
- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店.
- 小林亜希子 (2010)「非項位置としての SPEC-T」『英語と教育』1: 56-75.高知英語学英語教育研究会.
- 佐川誠義 (1978)「日本語の数量詞移動について」『法政大学文学部紀要』24: 31-46.
- 鈴木彩香 (2013)「述語の解釈からみた名詞句の解釈に関する統語論的研究」筑波大学人文・社会科学研究所,中間評価論文.
- 三尾真理(1979)「疑問詞とその用法」『日本語教育』36: 73-90.日本語教育学会.
- 三原健一(1998)「数量連結構文と「結果」の含意(上)(中)(下)」『言語』27(18-8): 86-95, 94-102, 104-113.
大修館書店.
- Carlson, Gregory N. (1977) Reference to kinds in English. Ph.D. Dissertation, Amherst: University of Massachusetts.
- Deguchi, Masanori (2012) Revisiting thethetic/categorical distinction in Japanese. *Poznań Studies in Contemporary Linguistics* 48: 223-237.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Endo, Yoshio(1994)Stage/Individual nouns. *Formal Approaches to Japanese Linguistics 1: MIT Working Papers in Linguistics* 24: 83-99.
- Harada, Shin-Ichi (1976) Quantifier float as a relational role. *Metropolitan Linguistics*1: 44-49.
- Heim, Irene (1982)The semantics of definite and indefinite noun phrases. Ph.D. Dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Heycock, Caroline (1993) Focus projection in Japanese. In: Mercè González (ed.), *Proceedings of NELS* 24: 159-187. Amherst, Mass.: GLSA Publications.
- Heycock, Caroline (2008) Japanese -wa, -ga, and information structure. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.), *The Oxford handbook of Japanese linguistics*,54-83. NY: Oxford University Press.
- Homma, Shinsuke, Nobuhiro Kaga, Keiko Miyagawa, Kazue Takeda, and Koichi Takezawa (1991). Semantic properties of the floated quantifier construction in Japanese. *Proceedings of the 5th summer conference 1991*, 15-28.Tokyo linguistics forum.
- Ishii, Yasuo (1991) Operators and empty categories in Japanese. Ph.D. Dissertation, Storrs: University of

Connecticut.

Kratzer, Angelika (1989) *Stage and Individual Level Predicates*. Ms. Amherst: University of Massachusetts.

Kratzer, Angelika (1995) Stage and Individual Level Predicates. In: Gregory Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.), *The Generic Book*, 125-175. Chicago: University of Chicago Press.

Kuroda, Shige-Yuki (1972) The categorial and thethetic judgment. *Foundations of Language* 9: 153-183.

Kuroda, Shige-Yuki (1992) Judgement forms and sentence forms. In: Shige-Yuki, Kuroda (ed.), *Japanese Syntax and Semantics*, 13-77. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Ladusaw, William A. (1994) Thetic and categorial, stage and individual, weak and strong. In: M. Harvey and L. Santelmann (ed), *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory IV*, 220-229. NY: Ithaca.

Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: Topic, focus and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.

Milsark, Gary L. (1974) Existential sentences in English. Ph.D. Dissertation, Cambridge: MIT.

Nakanishi, Kimiko (2008) The syntax and semantics of floating numeral quantifiers. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.), *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, 287-319. NY: Oxford University Press.

Tomioka, Satoshi (2007) Pragmatics of LF-intervention effects: Japanese and Korean *wh*-interrogatives. *Journal of Pragmatics* 39-9:1465-1654.

(鈴木彩香 筑波大学大学院生)

A unified account of two usages of *ga* and two interpretations of bare nouns

SUZUKI Ayaka

In this paper, I aim to give a unified account of the correlation between the two uses of *ga* discussed by Kuno (1973) and the two types of interpretations of bare nouns discussed by Diesing (1992). Kuno pointed out that *ga* has two usages: neutral description and exhaustive listing, and he claimed that the difference in usage results from the temporal specification of the predicate, that is, whether it is a temporary state or a constant property. On the other hand, Diesing also claimed that the semantic contrast between Stage-level and Individual-level, which is the same as Kuno's criterion, leads to the difference between existential and generic interpretations of bare nouns. I argue that their claims show different characteristics in terms of information structure, but we can unify them in terms of the specificity of the subject noun. Therefore, the contrast they each treated is considered to be thethetic/categorical difference in the judgment form, as discussed by Kuroda (1972, 1992). In addition, I also discuss how it should be positioned in the syntactic structure proposed by Diesing.